

■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

* : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

Ⓒ : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 UTokyo OCW 学術俯瞰講義
Copyright 2014, 吉澤誠一郎

The University of Tokyo / UTokyo OCW The Global Focus on Knowledge Lecture Series
Copyright 2014, Seiichiro Yoshizawa

学術俯瞰講義「新・学問のすゝめ—東大教授たちの近代」

白鳥庫吉と日本における東洋学の形成

2014年5月28日

吉澤 誠一郎(文学部東洋史学研究室)

I・東洋史学の始まり

にしあまね
西周『百学連環』

「History 即ち歴史たるものは、古今人世の沿革及び履歴を主として書き記せしものを言うなり」(大久保利謙編『西周全集』4巻、宗高書房、1971年、74頁)。

☆「歴史」という言葉は、古い漢語としての用例は少なく、むしろ History の訳語

明治時代における歴史学習

「万国史」(*Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography* 等)と『十八史略』
→その不満から「東洋史学」が生まれてくる

那珂通世の説明(桑原隲蔵『中等東洋史』序文、1898年)

歐洲の盛衰のみを叙述して、世界史又は万国史と名づくることの不都合なるは、事新しく言う迄もなし。世界の開化は、固より歐洲人の専有に非ず。東洋諸国、殊に皇国・支那・印度の如き、人類社会發達の上に、風化を及ぼせることの廣大なるは、復疑うべからず。且皇国は東洋の東端に位し、既往・現在・将来共に、東洋諸国と關係最も密なれば、国民たる者は東洋古来の盛衰沿革に就きて、明晰なる智識を有せざるべからず。これ尋常中学の歴史科に於て、国史・西洋史の間に、東洋史の目を加うる所以なり。

近年東洋史の書、世に行わるる者頗る多けれども、皆支那の盛衰のみを詳にして塞外の事變を略し、殊に東西兩洋の連鎖なる、中央アジアの興亡の如きは、全く省略に従うが故に、アジア古今の大勢を考うるに於ては、不十分なることを免れず。予常に之を憾とせり。此頃文学士桑原隲蔵君中等東洋史を著わして予に示せり。予受けて之を読むに、史料を東西に取りて博引旁搜し、善く東洋民族の盛衰消長、列国の治乱興亡を述べ、簡にして要を得たり。(『桑原隲蔵全集』4巻、岩波書店、1968年、3頁)

帝国大学文科大学における「史学科」の設置(1887) このときの七学科のひとつ

哲学科・和文学科・漢文学科・史学科・博言学科・英文学科・独逸文学科

リース(Ludwig Riess)の来日 ランケ史学の導入

なお 1904 年に文科大学は、哲学科・史学科・文学科の 3 学科に再編

京都帝国大学文科大学の新設(1906) 東洋史学講座の誕生(1907)

東京帝国大学における**東洋史学科の成立**(1910) cf. 国史学科・西洋史学科

☆文学部の組織変遷については、毎年刊行の『文学部便覧』「文学部の沿革」参照

戦前東洋史学の特徴

内陸アジア史、東西交渉史の重視

政治的背景 グレート・ゲーム

新疆への探検競争

スウェン・ヘディン、オーレル・スタイン、大谷光瑞

ポール・ペリオと敦煌文書

「西洋史」と「東洋史」のギャップを埋める

→「東洋史学」における「四裔偏向」の傾向（中国を脱中心化する）

※桑兵『国学与漢学——近代中外学界交往録』（浙江人民出版社, 1999）.

ポイント 世界史というものがまずあって「東洋史」と「西洋史」に分けたのではない。

むしろ、西洋人の歴史書と中国人の歴史書がすでにある状況のもとで何とか全体的な歴史像を作ろうとしていた

桑原隲蔵『中等東洋史』（1898）

東洋史とは、主として東方アジアに於ける、民族の盛衰、邦国の興亡を明かにする一般歴史にて、西洋史と相並んで、世界史の一半を構成する者なり。

II・白鳥庫吉の学問

白鳥庫吉略伝

1865 年 千葉県に生まれる

帝国大学文科大学史学科で学ぶ ☆リースを通じてヨーロッパの歴史学の手法を吸収

1890 年 帝国大学を卒業し、学習院教授となる

1901-1903 年 ヨーロッパに留学

1904 年 東京帝国大学教授を兼任する

1911 年 東京帝国大学教授を本務とする

1922-1923 年 欧米を視察

1925 年 定年退官

1942 年 死去

☆詳しくは、石田幹之助「白鳥庫吉先生小伝」(『白鳥庫吉全集』10巻、1971年)参照

白鳥は東京帝大史学科の第一期生 白鳥の回想(1938年)

所で面白いのは、その大学の史学科で何を教えたのかと言うと西洋史だけであって、独乙の史学者ルドウィヒ・リース先生が唯一の先生であり、先ずヨーロッパの太古よりフランス革命前迄の西洋史の概説をされた。(「史学界に対する重野博士の見識」『白鳥庫吉全集』10巻、岩波書店、1971年)

ハンガリーにおける白鳥庫吉(1902年5月28日市村瓊次郎あて書簡)

私は昨年の冬柏林大学と東洋学校へ入学して、トルコ語と東亜の地理を修める積でしたが、気候がよろしくありませんでしたから、今年の一月の末にドレスデン・ブラーグ・ヴィンを経て当ブダペストに落ちつき、只今は此処の大学と東洋学校で語学のほうはトルコ語、史学の方は専ら西洋史に関係ある東洋民族の歴史を研究致して居ります。御承知の如く匈民は東洋から只今の地に舞い込んだのですから、当国の学者は自国の本源を探ろうという考で、種種の方面から自国に関係ある東洋民族の研究を致して居ります。(『白鳥庫吉全集』10巻、1971年、岩波書店、4頁)

白鳥庫吉の「東洋史」概念 (高桑駒吉著『参考東洋大歴史』序、1906年)

近代西洋各国が相争って其の勢力を東洋に拡張せんと務むるに従って、彼の学界の視線も自からまた此の老大陸に向って傾注せらるることとなれり。されば彼の所謂東洋学者は、或は文書の解釈に、或は実地の踏査に、或は専門の学会に学校に、孜々として其の研鑽を怠らざるが故に、新事実は続々として発表せられ、其の盛況実に欽羨に堪えざるものあり。然るに我が国に於ては還て此の進運を察するもの少なく、未だ東洋研究の学校もなければ、またアジアに関する書類を集めたる図書館の設置もなし。従って邦人の東洋の事情に迂闊なること、寧ろ驚くに堪えざるものあり。是れ豈明治盛代の一大欠点にあらずや。

顧に明治の初年我が邦が泰西の文物を輸入するに急なるや、之を撰択咀嚼するの暇なく、偏に彼の国の模倣を事としければ、学校に於て歴史を授くるに際しても、彼の国に行われたる教科書を直に採り来って之を使用せり。而して此等の書は題して世界史或は万国史と称すと雖も、その実は欧米諸国の治乱興亡を記述するに止まりて、東方アジアの事蹟に於ては殆ど等閑に付せり。一時我が国の学問間に歓迎せられたるスウェーデン氏の『世界史』の如きは、カウカス民族にあらざるものには真正の歴史なしとまで断言せり。是れ蓋し大に邦人を誤らしめたる思想の一ならずんばならず。(『白鳥庫吉全集』10巻、1971年、岩波書店、445頁)

白鳥庫吉の研究領域

- (1) 満鮮史
- (2) 塞外史、西域史
- (3) 中国と日本の古代史

その特徴や関心

民族の言語や血統の起源を探ろうとする
漢文史料に出てくる地名がどこにあたるのか解明する
漢文史料と西洋の文献をつきあわせて考証する

古伝説の研究 漢学を批判する「東洋史学」

章炳麟による罵倒

「白鳥庫吉は、自分では歴史を知っていると言う。堯・舜・禹は天・地・人を表現したものだ」と称するなど、特にでたらめで、お話にもならない」（「与羅振玉書」『太炎文録初編』）

日本の大陸政策との関係 南満洲鉄道会社の依頼を受けて、満洲の歴史を研究

『満洲歴史地理』序

露西亜戦役の局面収まりて、南満洲の経済的経営が、我が国民によりて著手せられ、朝鮮に対する保護と開発との任務が、また我が国民の頭上に落下し来りし時、余は学術上より満・韓地方に関する根本的研究をなすの急務たるを唱説したりき。（『白鳥庫吉全集』10巻、岩波書店、1971年、449頁）

☆詳しくは、井上直樹『帝国日本と〈満鮮史〉—大陸政策と朝鮮・満州認識』（塙書房、2013）。

III・戦後の批判と反省

戦前期日本における「東洋史学」の位置

精密な実証研究

国際学界で承認されることへの強い願望 → 欧米の学術の作法への依拠

日本での漢学批判、おくれた中国という優越感

中国を中心とする歴史観を相対化（日本ナショナリズムの満足）

日本のアジア侵略への一定の関与

旗田巍の議論

中国はおくれた国であり、その文明は不合理なものである、というのが、東洋史研究者がもっていた一般的観念であった。そして中国を研究すればするほど、中国の欠点だけがはっきりする、という傾向があった。進歩的立場に立つと思っていたものも、発展段階論の機械的適用で同様の傾向におちいった。意識的あるいは無意識的に、中国および中国人に対する蔑視感・優越感をもっていた。中国だけでなく、アジア全体について、同様の考えをもっていた。

こういう優越感が育った基礎には日本の大陸発展があったが、その重要な思想的側面を形成したのは近代主義であったと思う。東洋史学はヨーロッパ史学の系譜のうちで成立し、ヨーロッパ文明を基準にして歴史を考える傾向を多分にもっていた。〔中略〕今日において、この考え方〔近代主義〕の限界は明白である。この考えではアジア諸民族の解放という大きな事実をつかみようがない。中国革命の前提であった労働運動・農民運動・学生運動などは、この考え方からは単なる暴力的運動とみられた。したがって、歴史研究の重要な対象にはならなかった。近代主義の立場からは、批判・否定さるべき古くおくれた面はとらえられたが、古いものと同時に近代をも乗り越えて進もうとする新しいエネルギーは把握されなかった。そこに大きな限界があった。思想をすて何のものにもとらわれぬ公平無私の立場にたつと思っていたものが、実はこういう立場にたっていた。実証主義・考証主義といっても、実は一切の思想から解放されていたのではない。無意識のうちに思想をもっていたのである(旗田巍「日本における東洋史学の伝統」『歴史学研究』270号, 1962年, 33-34頁, のち幼方直吉・遠山茂樹・田中正俊編『歴史像再構成の課題』御茶の水書房, 1966年に再録, 221-223頁)。

中国近代史研究の興起 ←中国革命への共感 (ナショナリズム史観を肯定)

学問における中立性・客観性への疑念 →自らの「思想」を自覚することの大切さを指摘

残された問題

学問の中立性というのは幻想かどうか?

「正しい」思想に依拠した研究というものは、ありうるのか?

学問は、「世界標準」にのっとって評価されるべきものか?

吉澤の立場

アジア史の研究が日本社会の中で根拠をもつのは、日本とアジアの関係をどのようにみるのかという非常に現実的な課題意識と深い関係がある。だからこそ、国内外を問わず誰もが納得できるように客観的に実証する研究でなければならない。その意味で、史実と史料をあくまで重視したい。客観性や中立性を確保しつつ対話するのは、実は容易なことではないが、その困難を承知のうえで努力するのが学問なのである。